

図画工作科教育で育つ資質や能力

平松 清美

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2007年11月7日受理)

The Qualities and Abilities of Raising Children in “Arts and Crafts”

Faculty of Cultural Development, department of Cultural Development,

Major in Primary Education,

Gifu Women’s University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

HIRAMATSU Kiyomi

(Received November 7 , 2007)

1 はじめに

図画工作科教育は、他の教科から孤立した芸術だけをめざすものではない。21世紀を生きていく現代の子ども達にとって、図画工作科教育は単に個人的な教養的なものというより人間が生きていくために欠くことのできない重要な感性や創造性を養うものである。それを自由に自己表現する最高の教科である。

決して作品のよしあしがすべてを決定するものではない。成長しつつある児童の心身の調和的発展をめざす人間教育の一環として行われるものである。そして、児童が社会の変化に対応し、心豊かに主体的、創造的に生きていくことができるような資質や能力を育成するものである。

小学校学習指導要領の図画工作の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、つくりだす喜びを味わうようにするとともに造形的な創作活動の基礎的な能力を育て、豊かな情操を養う。」である。すなわち、児童が描いたり、つくったりなどの造形的な活動の喜びを十分に体験させ、自分なりに考えたことや感じた

ことを表現することにより、感性や表現能力、創造性を豊かにすることを目的としている。それが豊かな情操を育むことになる。

しかし、現場の小学校の図画工作科の教育では画一的な絵画表現や固定化された造形作品がまだ多く見られる。中には教師の指導性が色濃く表れ、児童の生き生きとした感性やはつらつとした新鮮さが見られない。

これは図画工作科教育がめざしている目標とはかけ離れ、児童一人一人が本来持っているよさや可能性が十分に生かされているのだろうか、児童は自己充実感に満ちているのだろうかと疑問に思うことが度々ある。

小学校教諭をめざしている学生が本校で図画工作科教育を学ぶ中で、学生自らが創造的な造形表現の喜びを体感し、自己充実感を味わいながら、その指導の在り方を身に付けなくてはならない。学生が造形活動をしながら自分自身のよさを発見し、基礎的な表現能力、知性、感性を磨くなど、教師としての資質や能力を身につけることを願い実践的授業研究に臨んだ。

2 目 的

図画工作教育を通して、私たちは何を一番大切にしているのだろうかと立ち止まって考えてみたい。学生自身が本来持っている感性や創造的な力をどこまでも伸ばし、その力が花開くことを援助する指導こそ大切にされなければならないと考える。

それは自己実現の喜びにつながり、創造的行動力に富む人間を育てることになるからである。そのためには、技術面の指導を強制しないで自ら自分らしい技法を生み出して、自分の思いのままに表現を楽しむ時間を確保したいものである。

また、材料を自由に生かし、表し方を自由に工夫し、失敗するなどの苦労や努力を重ねて自己の思いを存分に制作に打ち込む。その時、個々の創造的な技能や豊かな想像力、造形感覚などの資質や能力を伸ばすことをねらいとする。

造形活動の過程では自分自身のよさを発見し、持ち味を生かして存分に造形活動を楽しむ。それが自己実現の喜びである。

本論は図画工作科教育で大切にしなければならないことは何かについて授業実践を通して追究する。そして、小学校教諭をめざしている学生自らが図画工作科教育において「大切にしなければならないこと」を発見するようにする。それが教師として適切な指導援助ができる指導力につながり、資質、能力の育成になると考える。

3 仮説と方法

では、どのような授業を展開すれば学生自らが、感性や表現力、創造力を高めることができるのか。また、「大切にしなければならないことは何か」に気付き、教師として適切な指導援助ができる指導力が育成されるのか

を考え下記のような仮説を立てて授業の実証的実践研究を試た。

- (1) 学生の実態を把握し、まず、苦手意識を取り除くようにする。そうすれば、自信が付き、進んで持てる力を働かせ、つくりだす喜びを味わうことになる。
- (2) 表現したいもののイメージを描き制作の見通しを持つ。そして、思いのままに自由に表現の工夫をし、制作に打ち込める雰囲気をつくる。そうすれば、よりよいもの、納得するものを求めてつくり続ける態度や構想力、創造力が育成され、目標を実現しようとする感動が心を癒し、心身の調和的発達を促す。
- (3) 「失敗を自力で乗り越える」体験をする。そうすれば、どうしたらよいかと考える知的能力や表現技能、可能性が芽生える。こうしたときに再び制作に打ち込む意欲や態度こそが大切である。その時、その場の状況に応じて働く力、すなわち基礎・基本の力が育まれる。
- (4) 「学生が授業の主体者である」ことを貫く。そうすれば、教師に頼らないで思う存分、自由に表現活動を楽しむことができる。更に、学生の本来持っている能力を伸ばすことができる。教師主導型は自力で考えたり、乗り越えたりする力がつかなく受け身になり、独自のよさや個性の表現が乏しくなる。発想も、工夫も、構想もすべて自らの智恵と思考力で造形することによって、感性や表現する力、創造する力を自力で表出し、学生は「自ら学ぶ」ことの喜びや「学び方」を身につけることができる。
- (5) 活動の過程を通して学生一人一人を受容し、適切な「言葉がけ」をする。

そうすれば、材料や、用具の扱い方や生かし方を工夫し、造形感覚や技能が働き、さらによりよくしようとする意欲が継続

し、創造性を発揮する。そして、美的感覚を高めることができる。

- (6) 仲間の作品を鑑賞し合い評価し合う。そして、よさや美しさ、制作者の意図、気持ちや表現の面白さなどを沢山見つけて言葉に表す。忠告も一言は書く。

そうすれば、他の視点から見られる緊張や作品を味わう感性が育つ。互いの見方や感じ方を交流し、学び合おうとする態度や作品を鑑賞する力が育成できる。

- (7) グループ活動(「お話しを紹介」)を取り入れ、互いのよさや智慧を出し合い共に制作する。そうすれば、仲間のよさや個性を理解し人間関係が深まる。そして、集団における学び合いの精神や協力的な態度など、人間的な資質を高めることができる。

4 授業実践の主な内容

現在の小学校図画工作教育科において扱われている題材を取り入れる。指導要領に示されているようにA表現(1)(2)とB鑑賞(3)に関わらせて題材を選択した。

- (1) 題材名「自然の材料を寄せて」
目標...「いろいろな材料を集め、それに進んで働きかけ、思いのままに造形的な発想を楽しみ、作りたい物をつくる。」である。
- (2) 題材名「わたしの好きなお話の紹介」を粘土で表現する。
目標...「紹介したい物語の一場面を選び、登場人物の気持ちや情景を伝える」である。

5 授業実践と考察

- (1) 題材名「自然の材料を寄せて」の実践
これは小学校高学年の教材である。小枝などの自然木や木材、竹などを人物や動物に見立てて想像力を働かせてアート作品を作るのである。個性が存分に発揮されて面白い学習である。

学生に試作品を示すと「私も作ってみたい」の声が多く出た。すぐに裏山に行き材料集めをする。開放的で楽しい雰囲気である。

苦手意識を取り除き、道具の使い方をしっかり身につける。

授業に入る前に道具を使った経験を調査すると下記のようなのである。

	小・中学校で使ったことがある	家で使ったことがある
のこぎり	31%	12%
金槌	64%	67%
糸のこ	16%	0%
電気ドリル	0%	0%
ドライバー	21%	10%
ペンチ	12%	8%
万力	0%	0%

道具を使った経験といっても過去に1~2回程度であり、主に学校の授業である。全く

図(1)





経験のない学生もいる。あまりにも経験が浅い現実に驚き、道具の使い方を徹底的に身に付けるようにすることが不可欠であると考えた。

造形活動が多い図画工作科の指導ができる教師になるためには、道具の扱い方を心得ていなければならない。そこで、図(1)のように様々な道具の扱い方例を示し、電気ドリルで穴を開けたり、のこぎりの刃の方向を正しくし、板きれを切ったり、万力、ペンチの使い方方の練習をしたりして活動に入った。

学生は経験を重ねるごとに道具の使い方に慣れてうまくなってきた。自由に道具が使えらることは面白い。全員が夢中になって制作に打ち込み、興味も深まり意欲的な姿勢が見られるようになった。道具を使いこなすことができる喜びと自信が制作意欲を更に高め、個々のエネルギーが発揮され、学ぶ態度が変わった。活気が生まれたのである。

そして、よりよいものを作りたいという意欲が高まり数々の発想が生まれた。

表現したいもののイメージを描き制作の見通しを持つ。そして、つくりたいものを思いのままにつくって楽しむ雰囲気をつくる。

自然の材料といえば、木の枝、葉、実、草、石ころなどである。学生はこのような材料を中心にした造形活動に魅力を持ち、多様な材

料に出会って感激した。自然の材料は季節の移り変わりと共にその表情を変えて、いろいろな思いを抱かせてくれる。

学生は裏山で沢山の材料を集め、枝振りの面白さや不思議さに感動し、目と手、頭などを協働させながら全ての感覚を働かせている。

どんどんイメージの世界が膨らみ、こうしたい、ああしたいと夢が明確になってきた。材料集めの段階からすでに創作活動が始まっていることを自ら自覚した。

指導に当たっては可能な限り自由な雰囲気をつくることに心がけた。学生が自分で思いついた発想を自ら大切にし、尊重し、存分に表現を工夫できる「気持ちのゆとり」と誰にも束縛されない「安心感」を持たせるためである。学生が真から主体的に活動を始めたとき、初めて自分自身の持っている感性やよさ、創造性が顔を出しはじめた。制作計画を立て、材料を収集する態度は、まさに「自ら学ぶ」姿であった。

「失敗を乗り越える」体験をする。

学生は目標実現のために真剣に打ち込み始めた。材料を見るたびに次々と新たな発想が生まれる。発想が膨らむと、また新たな材料が求められ、構想は深く練られる。

今まで眠っていた自分自身の不思議な能力や感性の花が開き始めたのである。「構想は変化してもよい」という自由さが、更に意欲を掻きたてる。

しかし、枝が折れる。穴が大きすぎてつながらぬ。せっかくのいい枝振りが使えなくなった。切りすぎてしまった。などの失敗が続いた。イメージに合う自然木を探して裏山に行く。疲れて表現意欲が低下する。

しかし、手を貸さない。助けては力が付かない。喜びも感動も低下する。失敗を自力で

乗り越える姿を見届けたいからである。乗り越えて喜びを体感するまで待った。

Y子が乗り越えた。

Y子は枝をつなぐ穴を大きく開けすぎて、ぐらぐらになってしまったのである。

「この枝にしました。今度は穴の大きさを3ミリにしました。ほら、しっかり繋がったでしょ。はじめから枝の直径を考えればよかったのに・・・。」と、よく考えてから行動することの大切さに気付き、自己反省し、自らの甘さを理解した。Y子は失敗を乗り越えた。乗り越えた喜びの表情は生き生きとして可愛い。

このように大勢の学生が失敗を乗り越えては遅く成長していった。

B子は小刀で指を切った。出血の多さに驚いて半泣きになった。周囲も大混乱。

「ここは教師の出番だね。大丈夫だよ」とすぐに応急処置をした。腕を心臓より高く上げて、指を縛り血液の流れを止めた。教師になったときには同じようなことが発生する。処置の仕方もしっかりと伝えておくように伝えた。

B子は自分の小刀の使い方が悪かったことを反省した。処置の仕方も分かった。先生に処置してもらって安心できたことが嬉しかったと語る。教師になったときのためにもいい体験ができた。「失敗から学ぶ」姿は他にも数々あった。

学生は失敗しても、その時点で落ち着いて考えて、新たな工夫をすれば、よい智恵が生まれる。創造力も高まる。よい結果になる等、前向きに捉えて失敗を乗り越える喜びを体感した。こうした体験こそが大切である。「体験から学ぶ」学生は「生きていく力」の基となる人間としての資質が育成されたと考える。

「学生が授業の主体者である」ことを貫く

ようにする。

学生の本来持っている能力を伸ばすために知識や技能を押しつけないで「自力で考える」ことに心がけた。

助言や支援は個に応じた適切な支援のタイミングを見つける。など学生主体の学習に徹した。

教師は「自力で伸びる」ことを信じていることである。主体的に学ぶという「学び方」の面白さを体感し、児童に適切な支援ができる力を育てたいという願いからである。

学生の自ら考え、学ぶ姿を紹介

- ・ C子はいい枝振りが見あたらずに焦っていた。60%できたのに思い通りにできなくて壊した。また発想を変えた。大きさも変えた。試行錯誤した。努力を続けた。「こうして組み合わせれば動きができるんだ。ようし、できた。」と大歓声。
- ・ D子も材料を思いに合わせて切ったりつないだり、曲げたり加えたりして存分に楽しんでいる。しかし、表現したいもの特徴がなかなかぴたりこない。苦労している。「やっと見つけたよ。私の願いが叶ったよ。ここに枯れ葉を付けよう。ああ、きれいだ。自然っていいね。紅葉ってすばらしいね。見て、見て。」と自ら感動して作品を友人に見せている。

これらは「自力で伸びつつある」姿であり、自己実現の喜びを体感している姿でもある。満足そうな表情はすばらしかった。

造形表現を楽しんでいる学生の会話

- ・ 「作りたいものを自由に作ることができるってさ、メチャ楽しいね。」

- ・「うん、気持ちにゆとりがあっていいね。」
- ・「ね、ね、私の感性、けっこういけるって思わない？」
- ・「すごいものさ、自信持っていていいわよ。」
- ・「技法を生み出すのってさ、けっこう楽しいね。」
- ・「そうそう、好きにできる。だから、失敗しても恥ずかしくないよ。やり直せばいいことがわかったし。」
- ・「小学校の時より面白いね。」
- ・「そう思う。どんどん発想が出てくるよ。すごく面白いよね。楽しさが違うよね。」
- ・「途中やけど私、母さんに写真おくるわね...。」

これは無意識のうちに活動の楽しさや喜びを表している会話である。学生は自ら「学ぶ喜び」を体感しているといえる。創造表現の能力は自分の持てる力を働かせながら、新しい発想を生み、試行錯誤しながら表し方を工夫する中で培われる能力である。同時に主体的に取り組む中で技術や技能も培われていく。

学生は楽しみながら基礎的、基本的な資質を身につけている。

活動の過程を通して学生一人一人を受容し、適切な「言葉がけ」をする教師の接し方一人一人の表現活動に寄り添い、共に楽しみながら助言指導をすることを大切にしている。また、取組の様子や作品から、表現のよさや工夫点、努力や苦勞、表そうとしている思いなどをよみとり、言葉を掛けるようにしている。

技法や発想を押しつけない。指示もださない。学生自身に任せの方が個性に満ちあふれ、

生き生きとした大胆な作品ができるからである。活動の過程で一人一人に投げかけた言葉は下記のようなものである。

「いい枝振りを使ったね。体のくねりが実に面白く表現できていいねえ。」
「ほう、面白い発想だね。木目をうまく活用したね。」
「楽しそうな親子の雰囲気がいいね。目の形がとても優しそうだ。」
「さて、困っているね。それならこの枝振りをこうして使ってみたらどうかな。」
「釘でなく、ここはダボを使ってみよう。ほら、こうしてダボを使うと便利だね。」
「やあ、ずっと進まないね。苦勞しているね。さんならもう少しでいい発想が出てくるよ。今の苦勞が喜びに変わるよ。乗り越えよう。」
「おお、乗り越えたね。見事だ。さすがだ。」

など、一人一人の智恵や工夫、発想や感性のよさ、努力している態度などを見つけたり、思いや願いを理解したり、共感したりして言葉をかけるのみで、作品はどんどんよくなる。学生の主体性に任せたのである。

作品の鑑賞会と展覧会で記述

できた自分の作品はどれも見事であった。互いに鑑賞し合い鑑賞表に自由に思いを書いて交換した。鑑賞は、全体から受ける印象、よさや美しさ、作者の意図、表現の工夫のよさ、アイディアの面白さなどを感じ取りながら、自己の感覚や感性を高めることになる。「こうするのもいいよ」などと素直に意見交流もする。

互いに認められた喜びを感じ、自己充実感に浸った。それは、作品を尊重する姿勢に変わった。作品や表現にあこがれ、作品を大切

にする態度が自然に育まれたと言える。

そして、岐阜駅にて「木の造形作品展」を開催した。外部からの評価を受けて感動した。



・岐阜駅にて
「木の造形作
品展」を開催

(2) 題材名「お話の場面を紹介します」の実践

これは小学校中学年の教材である。自分の大好きな物語の一場面をイメージし、紙粘土で表現する教材である。仲間と協力して表現するほのぼのとした学習である。

本題材では紙面の関係上、下記の実践のうち、
について記述する。

実態を把握し、苦手意識を取り除く(略)
イメージを描き、思いのままに造形活動を楽しむ雰囲気づくり(略)

「失敗を乗り越える」体験をする。

「学生が授業の主体である」を貫く(略)

適切な言葉がけ(略)

作品を鑑賞し評価する。

グループ活動による人間関係づくり

「失敗を乗り越える」体験をする。

新製品の紙粘土は軽くて柔らかい。色を混ぜて使用できる。L子は色を混ぜたが、濃くなってしまい、持てるイメージの美しい色が出ない。そこで研究が始まった。

A まず紙粘土の量を増やしてみた。一度付いた色の感じは変わらず、美しさは表現できない。

I 粘土の量と絵の具の量の調整が必要であることに気付いた。そして、絵の具の量と紙粘土の量の加減を調べた。

ウ 淡くて美しい色彩になる標準量を調べた。

実験の結果、最初から大量に混ぜないで0.2グラム位から少量で色混ぜするとイメージしていた美しい色彩になることが分かった。

下記のようなのである。

グラム	赤	青	黄	黒
25	0.5	0.6	0.6	0.1
50	1.5	1.0	1.5	0.5
100	2.5	2.0	3.0	1.5
200	6.0	5.0	6.0	3.0
500	10.0	11.0	12.0	5.0

決して混ぜすぎないように注意して色づくりをするようになった。他のグループも色の混ぜ具合には細心の注意をして「美しい色づくり」に励んだ。どのグループもイメージした感じのいい色彩で表現することができた。

「これではいけない」と気付いて、失敗から学び、よりよい方法を実験的に調べて、自慢の作品づくりにかける意欲や態度は、まさに感性や表現力、創造力を高める資質や能力であると考えた。

作品を鑑賞し評価する。

非常に美しく、夢のある作品が完成した。学内で作品展示会を開催し、互いに作品を鑑賞して楽しんだ。自他の作品を含め、「作品のよさや美しさ、工夫点、発想の面白さ、表現の技能、作者の意図、努力や苦労、喜び、失敗を乗り越えた素晴らしさなど」作品の見



【上の作品は「おむすびころりん」(お話の場面)「ボーリングをする私」(木の造形自然アート)】

方、考え方を高め、感性を磨き合った。鑑賞して「よさを見つける」試みは、教師になった時、児童の作品を温かく受容し、よさを認めて評価する力を付けることになる。

そこで、下記のような鑑賞表を交換し合った。そして、作品の見方を学び合った。

「お話の場面を表現しよう」の造形表現 鑑賞表

19:6:20 2年8組 ()より

お話の題名	おむすびころりん
作者 (G全員)	へ
感想	おじいさんの顔の表情や古い感じを出した服、2本足で立たせておむすびや細いしほ、お茶のうすめもろの質感や細かな部分にすてこだわててあり、驚きと感動が一気にきました。色彩が非常に素材になっており、日本語の良い味が出ておむすびのセンスを羨しく思いました。また、土台に本物の土をもらってきくとより、他グループでは果ては素晴らしい発想力創造力をもっているのだなと見入っていました。
アドバイス	大変工夫こらした作品ですが、お話しの題が書かれた三角の紙、お話の内容をちこことおむすびは話さなければ、おむすびに見えなくておむすび
鑑賞	おむすび、おむすび、おむすびの表現の面白さ、素晴らしい工夫、美的感覚 ・登場人物（人や動物）の表情や動き ・伝わる感動 ・発想や表現 ・情緒的な面 ・感動したところ ・その他
鑑賞を通して得たい力・人間性	

評価をもらった学生の喜びの声（学習ノート）より

- ・私たちの工夫点や一番表現したかったところをすごく誉めてくれて嬉しかったです。
- ・細部の表現までよく見ていてくれて感激しました。
- ・本物の土を使用して、土間を表現したことも認めてもらってとても嬉しい気持ちでした。
- ・教師になって誉めるときも、制作者の努力点や、表情のよさなど丁寧に誉めることが大切であると気がきました。
- ・忠告の一言も大事にします。実行します。

こうして感じたままを素直に伝え合うことによって、いろいろな見方や考え方があることに気付くと共に、自分なりの感じ方や見方が深められて鑑賞能力も高まったと考えられる。

グループ活動による人間関係づくり

自然木を材料にしたアート作品の造形活動と同様に、「お話の場面を紹介」の活動も学生は真剣に楽しく学んだ。下記に示すのは学生同士の活動の様子である。

無意識に発する仲間との会話

- ・「姫が毒りんごを食べて眠ったまま、その姫を見て7人の小人が泣いている様子を表現するのだから難しいよ。でも、やりがいがあるね。頑張ろうよ。」
- ・「私はお姫様の周りに飾る「花」を作りたい。」
- ・「いいよ。私たちは、小人を作るわ。あつ、でも、小人はみんなで作ろうよ。」
- ・「そうね、小人の表情をしっかり表現しようよ。」
- ・「うん、わかった。」
- ・「ほら、この花びらどう？」
- ・「わあ、きれい。花びら一枚一枚丁寧に表している。さん、すごいよ。」
- ・「さんのように丁寧に、美しく表現しよう。それが私たちの目標だね。わくわくするね。」



- ・粘土に色を混ぜて小人や花びらを美しく表現
- ・小人の悲しい表情を表現

このように、協力すること、協調すること、

責任感等が自然に身に付き、コミュニケーション能力や人間関係が深まってきている。

その後も活動を楽しんだ同じ仲間が、より親しくなって、課題のレポートを共に考えるなど、互いに学び合っている姿が見られてほほえましい。

6 まとめ

本学習では、図画工作科の教育で「大切にしなければならないことは何か」を肌で感じながら、自らの学びを記録に残した。教師になるための道のりはまだ遠いけれど、この図画工作科の授業を通して、自らの感性や表現力、創造力を高めることができた。

仮説(1)~(7)の実践的研究を通して、学ぶ喜びを体感し、その意義を理解したと思われる。

小枝や枯れ葉、かなな屑、木の実などの多様な活用や表現に独自性が生まれた。様々な工夫が見られ、創造性豊かな作品が多く見られた。アイデア豊かな発想や表現の面白さに仲間同士で感動しあった。道具の使い方も慣れた。手を怪我した学生からは、血を止めるために心臓より高く手を上げることや、その後を心配して電話する教師の優しさが大切であることも体験を通して学んだ。そして、何よりも適切な指導援助が素早くできる指導力を付けることの大切さを学んだ。

また、学生は「自分にこんな才能があったなんて」と達成感を味わい、自己実現の喜びを体感し、充実感に満ちあふれた。考えたり工夫したり、表現したりする喜びは基礎的・基本的な力となり、図画工作科で願う資質や能力が育成されたと考える。

「お話の場面の紹介」では、協力して作品づくりをすることの意義に気付いた。協力することは「尊重し合う」こと、責任感や遠慮、我慢、積極性、思いを伝える勇気など、集団の中で共に生きていくための人としての心得

を実感し、協調することの大切さなどに気付き、コミュニケーションを深めることができた。

また、どうすればさらに美しい色彩を創り出すことができるのかと実験するなどの追究を通して、納得できる方法を考えることができた。表現力を高めるための工夫は技能を高め、基礎的・基本的な力となった。これも主体的、創造的に生きていく力の基となる資質や能力が育まれた姿と言える。

鑑賞会では互いの作品のよさに感激し、様々な表現の工夫を学んだ。そして、精一杯相手の作品のよさを見つける練習ができた。作品鑑賞を通して見方、考え方も豊かになり、感性を高めることができた。作品は学内のいろいろな場所に展示してもらうなどして、多くの学生や先生方からも過分なる評価を受けた。

こうした気づきは、自らの智恵と思考力を働かせる機会を十分に与えたからであると考えられる。そして、自信と喜びを実感し、自らが本来持っている感性や創造的な力が花開き始めたといえる。まさに図画工作科教育が心身の調和的発展をめざす人間教育の一環として、心豊かに主体的、創造的に生きていく資質や能力を育てる(基礎・基本)土台を担うものである。

学生の記録より

T学生は「自分の作品にも仲間の作品にもすごく感動した。大勢に見てもらいたいと思った。表現の工夫や色の美しさが印象的で、家に飾っておきたい。」「親に何枚も写真を送った。」と素直な気持ちを述べている。

N学生は、持てる力を十分に発揮し、自分なりの新しい発想や発見、工夫などができて嬉しい。表現を楽しむ中で感性や創造性を伸ばすことが資質を高めることになるこ

とを学んだ。快い感動を味わっている。
E学生は活動の過程で「仲間との会話」「教師との会話」が気楽にできることは協力し合う人間関係や児童理解ができるだけでなく、認め、励まし、支援等ができるので大切である。教師になったとき、そういう指導ができる優しさや指導力を身につけたい。結果の善し悪しではなく、自己実現の喜びを体感することの大切さを学んだ。

T学生は「自由にのびのびと活動できる雰囲気こそが考える力や創造性、表現能力を伸ばすために大切であることが分かった。」

S学生は「本来持っている力が十分に発揮できるように、また、児童の願いが達成できるように適切な「言葉がけ」や怪我など生じたときには「適切な対応」が素早くできる力を付けることが大切であると思った。

H学生は「今まで知らなかった自分を発見できた。今、満足度100%。作品のよさや美しさ、努力や工夫などを認める「鑑賞の仕方」が学べて嬉しい。」貴重な体験ができた。

Y学生は「自分が創る楽しさを体感して、「自ら学ぶ」ことの大切さに気付いた。これが「児童が主体」の授業であることに気付いた。」「援助の仕方が分かって楽しい。」
W学生は「夢中になれた。私は失敗から学ぶことができた。道具の使い方も含めて自分に不思議な力が付いたようだ。自信となった。とても嬉しい。」

今後の課題

児童が表現したいと思う心の動きを受け止めて適切な「言葉がけ」ができる力を付ける。

理論と実践を関連づけた「学び方」を身につける。

さらに自らの感性や創造力を高め、発想を豊かにする資質や能力を付ける学習を続ける。

参考文献

- 『創り出す喜び』藤沢典明著 造形社
『図画工作科 基礎・基本と学習指導の実際』板良敷敏著 東洋館出版社
小学校学習指導要領解説図画工作編 文部省